

37

ニコラ・アンドリ (1658~1742) の
「オルトペディ」について (その二)

小林 晶

福岡整形外科病院

昨年(2007)の第108回総会では「オルトペディ」の造語者ニコラ・アンドリの出自、人物像と、「オルトペディ」という言葉の由来、および現在の整形外科との関係について述べた。「オルトペディ」は2巻よりなり、さらに続編がある。

第1巻は3章より成り、第1章は体表各部の美術的、解剖学的記述、第2章は小児の身体の変形、不良姿勢の予防と矯正、その他の小児の身体管理法であり、第3章は異常編である。

第2巻は顔面、頭部、歯、舌、発音の変形異常予防、矯正についての詳細な記述である。これは現在の口腔・形成外科関係のものである。次は公開審査論文で、論文の表題は「適度の運動は健康を維持する最良の方法か?」である。最後に、この論文のラテン語原文が収録されている。第2巻はこのように、最後の論文がむしろ近年のリハビリテーションの概念に近い。時間の都合上、今回の発表は第1巻のみとし、後日機会があれば第2巻について述べたい。

本書の付図を中心にして説明する。体の均整については、身長は躯幹幅の5倍、両中指端の上肢長とほぼ同じ、手の長さの10倍である。体の中心は恥骨結合にあり、上半身の中心は心臓の下端、下半身のそれは、膝である。

一方、小児では腕、脚は大人より比較的太く短い。両肩先端の間は頭の長さと同様である。大人ではおよそ2倍である。頭の長さは身長 $\frac{1}{5}$ で、頭が比較的長い。

変形の変形予防、矯正についての記述で、主なものは次のようである。

鎖骨の彎曲は女児では注意する必要がある、成長期に棒を持たせ、胸を前方に出すように訓練し、鎖骨が彎曲しないようにする。また体が一方に傾斜しないように注意する。

理想の椅子、頸部・前胸部の変形予防も、判り易いように具体的に示している。

姿勢の調整は体より対象物の方で行う。彎曲は勿論だが、姿が優美であることが大切である。椅子では肘を両脇に当て、肘掛けの高さで関節の屈曲を変え調節する。机の高さも重要で、脊椎の後弯が起らないように工夫する。

下着の交換で頭、頸部を過伸展させると、嚢状甲状腺腫を起こすことがある。両脇下に紐を通し、後から軽く引っ張りながら歩かせる。

肩の高さの不均衡の調整には、例えば左肩が沈下していれば、右脚のみで荷重を掛ける訓練で自動的に左肩が挙上してくる。

足部が内側へ向き易い子供には、就寝時膝を外側に向ける工夫、例えば両踵を接近させ、両足の間に心臓型の枕を挿入しておく。

以上はAndryの主張する小児の育て方の一端である。彼の功績はこのように、外形の異常に注意し、小児の姿勢、変形予防の必要性を力説し、特に女児を育てるのにより大きな注意を払っている。他動的でなく自動的な行為によって、筋肉の拘縮を除去してゆくのである。自己が自然と訓練を会得するように仕向け、筋訓練に基本を置いている。さらに身体的な注意だけでなく、躰の重要性も述べている。器質的疾患が存在すれば、軽蔑していた外科医の治療に委ねる場合もありえることは認めている。

本書の副題にあるように、躰では母親、乳母に対する意見を述べている。造語のとき影響を受けた、「Pédotrophie」、「Callipédie」の理念で、妊婦は窮屈な着物を着ない、情熱に溺れず、悲嘆、恐怖、過剰な喜びを避け、労働のあとの休息、食事の注意などを守る。子供には神の威厳を教え、他人への憎悪の念を持たせない、両親・偉大な人物への尊敬を教育し、文字に親しむよう勧めている。

現在の整形外科の基本となった「オルトペディ」という言葉は、手術法の発達、外傷の増加など運動器の治療学として、扱う疾患も拡大し、新しいリハビリテーション、画像診断・治療の進歩などによって内容が一変している。歴史家によっては、アンドリは「整形外科の父」ではなく、「継父」だとする人もある。ただ、時の啓蒙思想の影響で、小児の健康の保持、変形の矯正の意義を幅広く述べ、注意を喚起している点は評価できる。